

佐藤 俊樹・吉田 秀一・本島 正雄 編集

急 病 《人間の医学シリーズ 8》

東北大学教授・病院管理学 島内 武文

かつて大学の医局時代、病気になった先輩の診療所を助けにいったことがある。患者は多種多様で生まれたての新生児から、大切な顔にカルブネルを出した妙齢の女性も来るということで、かけ出しの内科医として大分面くらったことであった。頭をしきりに左右にふっている幼児に往診して、てっきり結核性脳膜炎かと思ったところ、翌日にはケロリと治っていたのには全く自信をなくしたものである。

元来、実地医家は、あらゆる初期傷病を扱い、診断が難しいばかりでなく、その診療は傷病の予後に決定的な影響をもっている。したがってその仕事はなかなか難しいこととは覚悟していたものの、実際にあらゆる種類の患者について待ったなしの応接をしてみると、これは聞きしにまさる仕事であることを身にしみて

感じたことであった。

ところで、このたび、平素よりその医業への熱意において尊敬おくあたわな佐藤・吉田・本島諸先生の編集による「急病」を拝見し、早速ページをめくってみた。内容として身体各部の痛みや、呼吸や意識の障害、外傷、犬傷、中毒などはもちろんのこと、「大人がたおれて間もなく気がついたら」「泣きやまない乳児」「老人が尻もちをついて立てなくなったら」「がまんできないほどの下腹痛」「虫にさされたら」など、手取りばやい適切な項目が目につく。また各科にわたった急病が網羅されているので、若い先生方ばかりでなく、老大家においても専門外の知識を確認するにはもってこいであろう。「くびが急にまわらなくなったら」など、私にも便利な項目もあって、心にくいばかりの親切さで

ある。

しかも本書の特徴として、内容には単に臨床についてのみにとどまらず、検尿の注意から、休日当番制・休日診療所・救急センターなども論ぜられ、救急セットのリストにおよぶなど、永年の諸先生の実地の苦心に研究の結晶があり、まことに至れりつくせりというほかはない。しかも、それが冗長におちいることをさけて、必要最少限 Notwendiges Minimum にまとめられていて、平素の往診にはもちろん、旅行にも外出にもカバンの底にしるばせて、絶好の伴侶とするにふさわしく、お値段もわずかハイライト10個分で安いものである。すべての実地医家必携の書であらう。

B 6判 頁190 図10 ¥800 ㊦70

医学書院刊